

社会的養護における外国ルーツの思春期児童への自立支援に関する研究

—施設職員へのインタビュー調査に基づく探索的研究—

○ 山梨県立大学 山田勝美 (002051)

南野奈津子 (東洋大学・005932)、和田上貴昭 (日本女子大学大学・005219) 谷口純世 (愛知淑徳大学・003631)

キーワード：外国ルーツ、社会的養護、自立支援

1. 研究目的

わが国における在留外国人数は増加の一途を辿り、外国ルーツをもつ子どもたちの抱える課題もまた増大し、深刻化していると考えられる。山田と南野が携わった令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業『児童養護施設等における外国籍等の子ども・保護者への対応等に関する調査研究』において、児童養護施設では約4割の施設に1人以上の外国籍等の子どもがいると回答された。また、子どもの抱える主要な困難として、言葉・文化に係る困難、これにともなう学習の遅れ、加えて、自国で身につけてきた文化との差異等にもなうアイデンティティ形成の困難さ、偏見等にもなう自己肯定感の低さ、こうした中で孤立感を深めていく実態が浮かび上がった。ここに、家族との関係に起因する虐待やDVを受ける、もしくは目撃するといったトラウマを抱え込むような体験が加わることで一層子どもたちの困難につながっていたことが示唆された。

この調査研究を受け、我々は、複合的な困難を抱える外国にルーツをもつ子どもたちの支援にあたって、固有の課題を明確化しつつ、支援専門職に求められる具体的な知識や技術、及び支援専門職向けの研修モデル等の確立を図るために、本調査研究においては、自立支援の課題が端的に表れる思春期児童に焦点化し、その自立困難の特性と自立支援に求められる知識・技術等を明確化したいと考える。

なお、本研究でいう外国ルーツとは、子どもが外国籍であること、子どもが日本国籍であっても、父母(保護者)の両方またはいずれかが外国にルーツをもっていることとする。

2. 研究の視点および方法

今回の調査研究にあたっては、外国ルーツをもつ子どもを支援した経験のある児童養護施設職員への半構造化面接法を用いたインタビュー調査を実施した。質問においては、特に、思春期児童に対する支援において、特に困難だと感じられたこと、行った支援の工夫等を聴き取った。得られたデータを佐藤(2008)の「事例-コード・マトリックス」を参考として分析を行い、事例の個別性や特殊性を明らかにしようと試みた。

3. 倫理的配慮

本調査の実施にあたり、東洋大学「福祉社会デザイン学部研究等倫理審査委員会」倫理

審査による承認を得た（F2023-003S）。なお、本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はないことを述べておく。

4. 研究結果

結果として、4施設から8名の外国ルーツの子どもの聴き取りを行うことができた。性別は、男性5名、女性3名である。現在入所中の子どもが2事例あり、それ以外はすべて退所している。このうち、日本国籍をもつものは2名であり、他の6名は外国籍である。

分析の結果、4つのカテゴリ（以下、【 】で示す）と11のサブカテゴリ（以下《 》で示す）が生成された。外国ルーツの自立支援の課題について、まず、【本人の特性】があり、それが、【アイデンティティをめぐる課題】、【自己肯定感をめぐる課題】と相俟って、【様々な現実的課題】を引き起こしていることがみえてきた。【本人の特性】としては、精神疾患等の発達特性と〈語学力等のコミュニケーション能力〉があり、【自己肯定感をめぐる課題】としては、《過去の被虐待体験》や《家族に纏わる深刻な葛藤》、《居場所の不確かさ》が《生活における過大な要求の表出》、《OD といった精神的課題の表出》といった【多様な現実的課題】へとつながっていることがわかった。

5. 考察

8事例中、何とか適応していると考えられるものが5事例あり、このうち2事例についても、当初は深刻な課題があったが、施設の支援の結果、落ち着きをみせていると考えられた。これらは、【アイデンティティをめぐる課題】として、当初混乱を来していたと考えられるが、自国の文化性をもったコミュニティとのつきあいや外国語しか話せないなかで、そのつながりを確保され、元来の外国ルーツとしてのアイデンティティの保障に対する支援がなされていることが大きいと考えられた。そうした彼等の個別性を保障するとともに、過去の被虐待体験の受けとめもなされていくなかで、【自己肯定感をめぐる課題】もある程度回復していくのだと考えられた。

他方、現在も深刻な課題を抱えていると考えられる事例は3事例であった。その事例に共通していたのは、「日本人として生まれながら日本人ではない」という【アイデンティティをめぐる課題】であった。同時に、親が行方不明や亡くなるといった《家族に纏わる深刻な葛藤》を抱え込ませているといえる。これが重要な自立支援の課題として指摘できる。

本研究で新たに得られた知見としては、日本で生まれながら外国ルーツをもつ子どものアイデンティティ保障、これにトラウマといった心理的支援をいかに組み込むかといったところにあると考えられる。

なお、本研究は、日本児童養護実践学会第16回研究大会（2024年3月）の報告の一部に新たな分析を加え、加筆したものである。また JSPS 科研費 23K01917（社会的養護における外国ルーツの思春期児童への自立支援に関する研究）の助成の成果の一部である。